

歴史への内在：ボリス・エイヘンバウムの世界観

中 村 唯 史

1. 『テー・ヤー・テーゼ』をめぐって

ロシア・フォルマリズムの初期の目的は、「文学性、すなわちある作品をして文学的な作品にしているところのもの」¹を解明することにあつた。これは哲学的・思想的・歴史的・社会的など文学外的な観点に立脚していた旧来の文学研究の克服を意図したものだったが、詩的言語と日常言語を区別し、作品を手法の総体と捉えていくその方法は、やがてトロツキーやルナチャルスキーを含むマルクス主義者やバフチン・サークルなどから、フォルマリズムは文学を社会状況や時代変化から恣意的に切り離して考察しているとの批判を受けるようになった²。

もっとも、そのような批判を待つまでもなく、文学の構造や固有性を静態的に把握する方法の限界は、フォルマリストたち自身によって早くから認識されていた。ボリス・エイヘンバウム(1886-1959)が現在の自分たちの課題は「形式の進化の問題、つまり歴史-文学的研究の問題」であると明言したのは1925年のことだが(『形式的方法』の理論)³、彼らの関心はすでにその前年ごろから、①文学に関する従来の静態的な構造把握(共時態)をいかにして歴史という動態(通時態)へと開いていくか、②文学系列と文学外諸系列との相関関係をどう考えていくかという問題に移行していたのである。この時期のフォルマリズムの代表的な論考としては、ユーレイ・トゥイニャーノフ(1894-1943)の『文学的事実』(1924)⁴、同『文学の進化について』(1927)、エイヘンバウムの『文学的ブイト』(1927)などが挙げられる。

トゥイニャーノフとロマン・ヤコブソン(1896-1982)の共著『文学研究・言語研究の諸

¹ ロマン・ヤコブソン「最新ロシア詩」(Новейшая русская поэзия, 1921), 新谷敬三郎・磯谷隆編訳『ロシア・フォルマリズム論集』(現代思潮社, 1971), 76頁

² このいわゆる「フォルマリズム論争」の主要な論考については、桑野隆・大石雅彦編『ロシア・アヴァンギャルド6: フォルマリズム-詩的言語論』(国書刊行会, 1988) 235-315頁に日本語訳がある。またこの論争を考察したものとして、桑野隆「フォルマリズム論争再読: きたるべき詩学のために」, 同『バフチンと全体主義: 20世紀ロシアの文化と権力』(東京大学出版会, 2003) 69-98頁。

³ Борис Эйхенбаум: Теория «формального метода», *О литературе: работы разных лет* (Советский писатель, 1987), с. 375-408. 日本語訳として『形式主義的方法』の理論, 水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集1』(せりか書房, 1984), 215-270頁(小平武訳)等。なお本稿におけるフォルマリストの論考の日本語訳は、先行の翻訳を参照したうえで、文責は著者にある。引用に際しては、原則として最初の引用時に、底本における掲載箇所を示すに留め、個々の引用の該当頁をいちいち示す煩は避けることにする。

⁴ Юрий Тынянов: Литературный факт, *Ю. Н. Тынянов: Литературный факт* (Высшая школа, 1993), с. 121-137. 日本語訳として「文学的事象」, 水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集2』(せりか書房, 1982), 71-103頁(水野忠夫訳)。

問題』(1929)⁵は、このような後期フォルマリズムの模索の到達点と見なされている。この論考は、①の問題について「どんな共時体系も、不可分の構造要素として、その過去と未来とを含んでいる。……どんな体系も必ず進化として提示され、その一方で進化が必ず体系としての性格を持つことをわれわれが認める以上、この(共時態と通時態との)対立は原理的な本質性を失ってしまう」(第4 テーゼ)と述べ、共時態が通時的な差違としてのみ表れるという説明によって両者の対立の解消を試みている。②については「文学の系列と他の歴史的系列との……相関性(諸体系の体系)にも解明すべき独自の構造法則があるが、個々の体系の内在的な法則を考慮に入れることなしに諸体系の相関性を考察することは、方法として致命的である」(第8 テーゼ)として、文学と他系列との相関の考察に対して文学系列の固有性の考察が先行しなければならないと主張している。共著者の頭文字を取って『テー・ヤー・テーゼ』とも呼ばれる『文学研究・言語研究の諸問題』は、構造主義の方法的先駆として現在でも評価が高い。

この『文学研究・言語研究の諸問題』は、病気治療のために一時出国したトゥイニャーノフが、1928年12月に、当時プラハで活動していたヤコブソンと会って話し合いを重ね、共同で執筆したものである。ただし彼らはこの作業を、モスクワのヴィクトル・シクロフスキー(1893-1984)との手紙による頻繁な連絡のもとにおこなった。その末尾に「今まで指摘してきた諸々の理論的問題・上記の諸原則から派生する具体的な課題……を、今後集团的に処理していくことが重要である。V. シクロフスキーを代表とするオポヤズを復興させる必要がある」という一節のあるこの論考は、シクロフスキーが編集に参加していた『新レフ』誌1928年12月号に掲載された(実際の刊行は1929年初頭)。それはトゥイニャーノフ、ヤコブソン、シクロフスキーの三人が、フォルマリスト・グループの再建をめざし、その綱領とするべく練った文章だったのである。

ところで、三者のあいだで当時やり取りされた書簡を読むと、再建されるオポヤズにエイヘンバウムを加えるかどうか、彼らの最大の懸案となっていたことがわかる。オポヤズ復興の中心人物だったシクロフスキー自身が逡巡していた。1928年11月23日付けのヤコブソン宛書簡で「われわれの観点からのロシア文学史を書くために、私はトゥイニャーノフとエイヘンバウムとともに多くを読み、討議を重ねている」⁶と書いた彼は、そのわずか4日後のトゥイニャーノフ宛書簡では、論集の執筆予定者として、トゥイニャーノフ、ヤコブソン、シクロフスキー本人のほかにはマール学派の研究者ポリヴァノフの名前を挙げたのみで、エイヘンバウ

⁵ Юрий Тынянов и Роман Якобсон: Проблемы изучения литературы и языка, там же, с. 148–150. 日本語訳として「文学研究・言語研究の諸問題(テー・ヤー・テーゼ)」, 前掲書 341–347頁(北岡誠司訳)等。

⁶ Виктор Шкловский и Роман Якобсон. Переписка (1922–1956): Предисловие, подготовка и комментарии А. Ю. Галушкина, Роман Якобсон: Тексты, документы, исследования (РГГУ, 1999), с. 125. 以下、フォルマリストの書簡や日記の日本語訳は著者による。

ムを除外している⁷。12月5日付けトゥイニャーノフ宛書簡では、エイヘンバウムをオポヤズ再建メンバーのリストに入れてはいるが、「彼のトルストイについての本は私は気に入らないが」との留保付きである⁸。

一方、プラハで会合を重ねていたトゥイニャーノフとヤコブソンは、シクロフスキーに対して、一貫してエイヘンバウムをグループに入れるよう主張したが⁹、それは彼をマール学派への傾斜を強めていたヤクビンスキーやポリヴァノフと同列に置いたたうえでの、あくまでも戦略的な判断だった。トゥイニャーノフは1928年末のシクロフスキー宛書簡で「オポヤズを始めなければならない。……君と彼(ヤコブソン)と私とはともにまだ多くのことを成しとげられるだろう」と述べているが、エイヘンバウムの名前は挙げていない¹⁰。

もちろん、このような排除の動きは、オポヤズ復興を企図した三名とエイヘンバウムとの個人的な確執によるのではなく、基本的には文学研究上の方法をめぐる両者の見解の相違に起因していた。強く主張したのは、ヤコブソンだったと推測される。トゥイニャーノフとの邂逅とオポヤズ復興の企図をユーラシア主義の盟友ニコライ・トルベツコイ(1890-1938)に伝えた書簡(1929年2月2日付け)のなかで、彼は「私たちは何があってもオポヤズを再建し、ジルムンスキー一派の折衷主義はすでにいうまでもなく、エイヘンバウムの偏向に対しても闘争を始めることを決意した」と述べている¹¹。これを『文学研究・言語研究の諸問題』第1テーゼ中の「アカデミズムの折衷主義(ジルムンスキー他)や……文学と言語に関する学を体系的学問から挿話とアネクドートのジャンルへと変えようとする再三の試みとは、一線を画さなければならない」という記述と照らし合わせるなら、この論考が、名指しこそ避けてはいるものの、当時『レフ・トルストイ』(1928)などで伝記ジャンルへの傾倒を顕著にしつつあったエイヘンバウムを、論敵の一人として想定していたことは明らかである。シクロフスキーも1929年2月16日付けヤコブソン宛の書簡では「ボリス・ミハイロヴィチ(エイヘンバウム)は、最近の仕事で墮落して折衷主義に陥ってしまった。彼の文学的ギフトは俗流唯物論の最たるものだ。……結論。オポヤズは君が帰国した場合にのみ再興可能である。なぜならオポヤズとは、つねに三人のことだから」と明言している¹²。この「三人」が、シクロフスキー、ヤコブソン、トゥイニャーノフを指していることはいうまでもない。

だが、諸般の事情からヤコブソンのソ連帰国は実現せず、オポヤズが再興されることもなかつ

⁷ Из переписки Ю. Тынянова и Б. Эйхенбаума с В. Шкловским, *Вопросы литературы*, 1984, No.12 (以下 *ВЛ* と略記), с.193.

⁸ *там же*, с.194.

⁹ М. О. Чудакова: Социальная практика, филологическая рефлексия и литература в научной биографии Эйхенбаума и Тынянова, *Тыняновский сборник: вторые тыняновские чтения* (Импринт, 1986), с. 445.

¹⁰ *ВЛ*, с.196.

¹¹ *Роман Якобсон*, с. 127.

¹² *там же*, с.127-128.

た。トゥイニャーノフは1929年3月31日付けのシクロフスキー宛書簡で「とはいえ私は彼（エイヘンバウム）がとても好きだ」と述べている¹³。1921年の亡命後は祖国に生活基盤を戻すことがなかったヤコブソンはともかくとして、ソ連で生きつづけたシクロフスキー、トゥイニャーノフとエイヘンバウムとの交友は、けっきょくは彼らの死まで絶えることはなかった。だがそれは彼らが研究上の立場の相違を、個人的な友誼の問題に帰着させ、うやむやのままにってしまったことを意味してもいた。

エイヘンバウムと他の三者との懸隔がきわめて大きいものだったこと、少なくとも後者がそう認識していたこと、そしてそれが主に文学史をめぐる見解の相違だったことは、以上のような『テー・ヤー・テーゼ』成立前後の状況から明らかである。では両者の相違とは、具体的にどのようなものだったのだろうか。

2. 『文学的ブイト』と『文学の進化について』のあいだ

1920年代後半のフォルマリスタたちのあいだでのエイヘンバウムの孤立は、従来のフォルマリズム研究ではあまり指摘されず、むしろトゥイニャーノフとエイヘンバウムが連携して、後期フォルマリズムの文学史への展開を主導したかのように説明される場合が多かった。フォルマリスタの書簡や日記の刊行に尽力したソ連（ロシア）の研究者たちも、おそらくフォルマリズムの一体性という神話を壊したくなかったためだろう、この点については示唆するだけに留めている¹⁴。だが近年キャロル・エーニや八木君人が指摘しているように¹⁵、文学史をめぐるエイヘンバウムとトゥイニャーノフの構想のあいだには決定的な相違が存在した。そしてそのことは、少なくともシクロフスキーやトゥイニャーノフの側からは、当時からエイヘンバウムの「偏向」として認識されていたのである。

両者の構想の相違は、1927年の9月と10月に同じ『文学哨所』誌にあいついで発表された二つの論考——エイヘンバウムの『文学的ブイト』¹⁶とトゥイニャーノフの『文学の進化について』¹⁷とに明瞭にあらわれている。二つの論考の異同を整理してみよう。

単なる「事実」の集積を、歴史体系そのものではなく、体系のための素材であると見なしている点では、どちらの論考も同様である。いいかえれば、歴史体系が記述主体によって構築さ

¹³ Чудакова, с. 444.

¹⁴ Ю. Н. Тынянов: *Поэтика, История Литературы, Кино* (Наука, 1977. 以下ПИЛКと略記), с. 508. ほか。

¹⁵ Carol Any: *Boris Eikhenbaum: Voices of a Russian Formalist* (Stanford University Press, 1994), pp. 104 - 109. 八木君人「Ю. Туиニャーノフの『文学史』再考」, 『スラヴ研究』(北海道大学スラブ研究センター) 53号(2006) 155-191頁。なお本節の記述は、とくに後者から多くの示唆を受けている。

¹⁶ Борис Эйхенбаум: *Литературный быт, О литературе*, с. 428-436. 日本語訳として「文学の風俗・慣習」, 水野編『ロシア・フォルマリズム文学論集1』283-298頁(小平武訳)。

¹⁷ Юрий Тынянов: *О литературной эволюции, Ю. Н. Тынянов: Литературный факт*, с. 137-148. 日本語訳として「文学の進化について」, 桑野・大石編『ロシア・アヴァンギャルド6: フォルマリズム-詩的言語論』189-202頁(松原明訳) ほか。

れる表象であることは、エイヘンバウムにとってもトゥイニャーノフにとっても自明の前提だった。両者の相違は、そのうえで、この記述する主体をどのように考えるかという点にあった。

私たちはすべての事実を一度に見るわけではなく、いつも同じ諸事実を目にしているわけでもなく、またいつも同一の相関関係の解明を必要としているわけでもない。……文書や種々の回想に横たわっている膨大な過去の素材は、ただ部分的にだけ [文学史に] 採り入れられる (しかもいつも同じ素材とは限らない) が、それは理論が、さまざまな意味上のしるしに基づき、過去の一部を体系に導入する権利と可能性を供するためである。もし理論がなければ歴史体系もまた存在しない。諸事実を選別し、認識するための原則もないということになるからだ。

『文学的ブイト』の冒頭で示されているエイヘンバウムのこのような考えは、一見したところ、理論とそれに立脚する記述主体の専制的な優越を想定しているかのように読める。だが、実際にはその逆である。

だが、あらゆる理論は、事実そのものへの関心によって示唆された作業仮説であり、必要な事実を抽出し、体系にまとめるためにのみ、必要とされるにすぎない。

記述する主体の依拠する理論が普遍的な真理たりえず、かならず「作業仮説」に留まるのは、それが「現代、すなわち、現に目の前にある最も主要な諸問題の動向によって決定される」ものだからだ。資料にアプローチする際にいかなる理論を適用するかは、最終的には、記述主体の意思や選択によるのではなく、彼を圍繞している同時代の社会的配置によって定まるというのである。

「ブイト」はエイヘンバウムの論考の標題ともなっている、後期フォルマリズムのきわめて重要な概念だが、本来は「風俗」「慣習」「日常」等を意味するこの語¹⁸を用いてエイヘンバウムが言い表そうとしたのは、記述主体の存在形式を定めている諸系列の社会的配置である。たとえば「現在危機に瀕しているのは、文学それ自体ではなく、その社会的なあり方であると、はっきり断言することができる。作家の職業的な立場が変わり、作家と読者の関係が変わり、文学活動の習慣的な条件と形式が変わった——ほかならぬ文学的ブイトの領域で決定的な変動が生じ、文学と文化の進化がその外で形成される諸条件に従属しているという一連の事実を明

¹⁸ とくに 20 世紀初頭のロシア文化におけるブイトという語の含意については、Aleksander Flaker: *Быт, Russian Literature*, XIX (1986), pp. 1-14, また近年の成果としては、近藤大介「日常生活 (ブイト) という文化の場: ロシア・フォルマリズムの文学史研究から」、『言語社会』(一橋大学) 1号 (2007) 407-386 頁を参照せよ。

るみに出した」。記述主体による世界観や理論、またそれらに基づく事実の選択は、直接には主体の意思や志向によるが、その意思や志向は自立的なものではなく、諸系列の社会的な配置という意味でのビットによって定められている。時代が変わり、したがって主体の存在形式を定めるビット＝社会的配置が変われば、彼が記述する歴史体系も変わり、体系を構築するべく選択される事実もまた違ったものになる。

彼の文学史において、記述主体が恣意を働かせる余地はほとんどない。エイヘンバウムの考えによれば、記述する主体は同時代の文脈・社会的配置に内在し、その厳密で圧倒的な規定を免れないのである。

トゥイニャーノフの方は、記述する主体とビットとをどのように捉えていたのだろうか。

この根本的な問題を分析するためには、文学作品がひとつの体系であり、文学もまたひとつの体系であることを、前もって定めておく必要がある。このような基本的了解のもとでのみ、多様な現象や系列の混沌を観察するのではなく、研究するような文芸学の構築が可能になる。

トゥイニャーノフにおいて、記述する主体は、文芸学を構築するために設置される、いわば方法的な基点である。記述主体は、エイヘンバウムの場合とは違って、同時代の社会的な文脈から自律しており、その限定を受けない。その意味で、この主体は時代や社会を超越しているといえるが、その一方で、設定上かならず文学の系列に内在する。

このような記述主体を基点とする学問においては、「個々の要素を体系から切り離し、それらを体系の外で相関させる、すなわちそれらの構造的な機能なしに、他の諸体系の同様の系列と相関させるのは誤りである」。ある事実が文学史の素材——「文学的事実」となるのは、その事実が文学の系列と相関するかぎりにおいてである。「文学系列の体系とは、なによりも、他の諸系列との絶えざる相関性の内にある文学系列の諸機能の体系である」が、その相関性はかならずや文学系列の体系の内部という記述主体の位置から語られる。「事実が文学的事実として存在するかどうかは、その示差的な性質（すなわち文学の系列と相関しているか、文学外の系列に相関しているか）によって、いいかえるなら、その機能によって決まる。ある時代に文学的事実であるものが、他の時代には一般的な発話としてのビットの現象となることもあれば、その逆のこともあるだろう。それは所与の事実が関係する文学の体系全体によって決まる」。

トゥイニャーノフにおいて、ビットとは文学の系列に隣接し、これと相関する諸系列のことである。「ビットはその構成において多角的で多面的」だが、「なによりもその言語面において文学と相関している」。記述する主体は文学の系列に内在しているので、ビットが文学の系列と相関し、文学体系内でその示唆的性質が知覚される場合にのみ、これに関わるということに

なる。

記述主体とブイトに関するエイヘンバウムとトゥイニャーノフの考えは、このように、たがいに大きく食い違っている。エイヘンバウムの記述主体は、文学の系列に対してではなく、自分が生きる時代に内在する具体的な存在である¹⁹。彼の注意や志向は、その時代の社会的な配置によって厳密に規定され、ほぼこれに従属している。エイヘンバウムのブイトは、主体を取り巻くこのような諸系列の配置の総体を指すが、それは主体の存在形式を定め、画然と輪郭づけている。

これに対してトゥイニャーノフの記述主体は、方法的基点として文学系列の内に設定される視点である。もちろんそれはこの主体が文学系列内に閉塞することを意味してははず、むしろその逆だが、文学系列を恣意的に超越できるようなものでもない。

個々の作品は、その志向について語る以前に、文学の系列と関連しなければならない。大きな数の法則は小さな数に適用されない。

検討は、構造的機能から文学的機能へ、文学的機能から言語的機能へと進まなければならない。……進化の研究は、文学系列から、相関する最も近接した諸系列へと進まなければならない、重要ではあってもかけ離れた諸系列へと進んではならない。

記述する主体は、文学系列に内在する位置から出発して、文学に相関する隣接諸系列、そこからさらに隣接するまた別の諸系列へと、段階的に視野を拡張していく。このときブイトとは、主体によって記述される受動的な素材である。記述主体を厳しく定義し、規定する社会的配置としてブイトを捉えていたエイヘンバウムの場合とは対照的に、トゥイニャーノフのブイトは、文学系列への内在から出発し、この系列の内部から外へとしだいに拡張していく主体によって、「文学的事実」として体系に組み入れられるのを待つのである。

『文学的ブイト』と『文学の進化について』のあいつぐ発表によって1927年に表面化した、文学史の構想をめぐるエイヘンバウムとトゥイニャーノフの相違は、このようにきわめて大きく、根本的とすらいえるものだった。だがその後しばらくは、シクロフスキーとトゥイニャーノフの側から、両者の懸隔を埋める努力が試みられたようである。そもそも『文学の進化について』という論考自体が、『文学的ブイト』への対論だった。この論考の冒頭には「ボリス・

¹⁹ エイヘンバウム「アンナ・アフマートヴァ」(Anna Akhmatova, 1923, Борис Эйхенбаум: *О прозе. О поэзии*, Художественная литература ленинградское отделение, 1986, c. 374-439.)などを参照せよ。なおこの論考に関しては、八木君人「ボリス・エイヘンバウムの文芸学における文学作品の非文字テキスト的要素」、『ロシア語ロシア文学研究』第40号(2008)9-16頁が示唆に富んでいる。

エイヘンバウムに」という題辞があるが、両者の見解の根底的な相違を考慮するなら、あきらかにこれは献辞ではなく、むしろトゥイニャーノフからエイヘンバウムへの問いかけだったと考えられる²⁰。

エイヘンバウムの日記によれば、1928年3月15日にシクロフスキーとトゥイニャーノフが彼の自宅を訪れ、文学史の構想について議論しているが、その場では両者の対立は明確なかたちを取るには至らなかったようだ²¹。だがその5日後にエイヘンバウムが芸術史研究所で近刊予定の伝記『レフ・トルストイ』の最初の2章を朗読した際、トゥイニャーノフの反応は厳しいものだった。同日のエイヘンバウムの日記には「ユーリー（トゥイニャーノフ）の態度が私を悲しませた。最近の私と彼の関係について考え込まないわけにはいかなかった。彼は暗い、（故意に）凍りついたような、乾いた顔をして、私の方に目を上げずに、メモを取りながら聞いていた。その後で話したが、乾いて酷薄で敵意ある口調で、些細な部分に拘泥してきた——まるで他人のように」とある²²。シクロフスキーも7月14日に再びエイヘンバウムを訪れ、彼の仕事を批判している。その翌日のエイヘンバウムの日記には「（シクロフスキーは）、本（『レフ・トルストイ』）における私の“伝記主義”を心配している——あまりに大きな譲歩ではないだろうか。私はこうしたすべてを違ったふうに感じている」との記載がある²³。

両者の議論は平行線をたどり、第1節に見たようなエイヘンバウム排除の動きへとやがていたるのだが、文学の固有性を追求した初期フォルマリズムとの連続性の観点からみれば、記述主体を文学系列に内在させ、その位置から隣接する諸領域へと視野を拡大していくトゥイニャーノフの構想の方が妥当なものだったといえるだろう。逆にいえば、エイヘンバウムの構想には、あきらかに初期フォルマリズムとの断絶が認められる。

エイヘンバウム自身は、この断絶を「人間への郷愁」として表現している。

歴史が私を疲労困憊させた。だが私は休みたくはないし、またそうすることができない。私には行為への郷愁、伝記への郷愁がある。……いま必要なのは人格だ。自分の生を創造するような人間（を書くこと）が必要なのだ。²⁴

「偏向」後のエイヘンバウムの眼前にあったのは、もはや自律し、固有性を持った「文学」ではなく、みずからの生を構築しようとする「人格」「人間」だった。そしてそのような人間

²⁰ リディア・ギンズブルグは、エイヘンバウムとトゥイニャーノフが共同で主催していたゼミナールが1927年前半に紛糾して活動停止となったことを証言している。см.: ПИЛК, с. 520.

²¹ ПИЛК, с. 519.

²² Чудакова, с. 441.

²³ Marietta O. Čudakova: Социальная практика и научная рефлексия в творческой биографии Б. Эйхенбаума, *Revue études slaves*, LVII/1 (1985), p. 36.

²⁴ ВЛ, с. 189.

は、「歴史」の内で思惟し、行動するのである。では、「文学」の自律をめざした初期フォルマリズムの闘将としてふるまってきたエイヘンバウムが、このように「文学」よりも「歴史」を前景化するようになったのには、どのような背景があったのだろうか。

3. 歴史という語の二つの審級

エイヘンバウムの研究者としての関心が一貫して文学史の分野にあったことは、その著作歴をみればあきらかである。前節で見た1927年の『文学的ブイト』の発表後、彼は1959年の死まで、けっきょくは未完成に終わる評伝『レフ・トルストイ』に心血を注いだ。初期フォルマリズムを代表する論考として著名な『ゴーゴリの「外套」はいかにつくられているか』(1919)²⁵のような作品構造分析は、彼の著作全体のなかでは、むしろ例外である。エイヘンバウムの本領は、フォルマリズム批判への応答として書かれた『「形式的方法」の理論』が、そのまま明晰なフォルマリズム史となっていることに、よくあらわれている。

前節で見たように、エイヘンバウムが『文学的ブイト』で諸系列の社会的配置としてのブイトに焦点を当て、文学系列に内在する視点に立脚しようとするトゥイニャーノフと対立するようになったのは、1920年代後半のことだった。それまでは彼もまた「詩学は目的論的原理の基礎のうえに築かれ、それゆえに手法の概念に立脚しなければならない」(『ロシア叙情詩のメロディカ』²⁶)など、主張としては文学の固有性を重視する発言をおこなっていたのである。だが『若きトルストイ』(1922)、『レールモントフ：歴史的-文学的評価の試み』(1924)など、この時期に書かれたエイヘンバウムの文学史的著作を読むと、文学の枠内に留まろうとしていたとはいえ、当時から彼の興味が、社会的配置や文芸思潮の変遷と作家との関係に向いていたことがわかる。

現在まで断片的に刊行されてきた彼の書簡や日記を読むとき、エイヘンバウムは「文学史」のなかでも「文学」よりむしろ「歴史」の方に憑かれており、それはたんに研究者としてだけではなかったとの印象を受ける。この意味で象徴的なのは、当初は医学を修めるために首都サンクト・ペテルブルグに出たエイヘンバウム青年が、音楽学校とペテルブルグ大学人文学部スラヴ学科に転じることを母親に告げた1907年2月4日付け書簡中の一文である。「今では完全に明らかなことですが、私にとって重要な学業は音楽と(文学も含む、最も広い意味での)歴史です」²⁷。ソ連の研究者チュダコヴァが述べているように、「歴史こそ、エイヘンバウムがその仕事においてつねに取り扱っていたというだけでなく……、日常生活においても彼の前に

²⁵ Эйхенбаум: Как сделана 《Шинель》 Гоголя, *О прозе. О поэзии*, с. 45-63. 日本語訳としては、桑野・大石編『ロシア・アヴァンギャルド6：フォルマリズム-詩的言語論』116-131頁(井上幸義訳)ほか。

²⁶ 新谷・磯谷編訳『ロシア・フォルマリズム論集』, 206頁。

²⁷ Письма Б. М. Эйхенбаума к родителям: Publication, commentaires et notes par Ol'ga B. Eichenbaum, *Revue études slaves*, LVII/1 (1985), p. 19.

ぬぐいがたく立ち現れていた最重要の現象であり、一種のファントムだったのだ」²⁸。

もっとも、前節で見たようなエイヘンバウムとトゥイニャーノフの文学史構想の食い違いを改めて想起するまでもなく、「歴史」とはときに曖昧で、多くの含意を帯びうる概念だ。エイヘンバウムが「歴史」というとき、それは具体的にどのようなものとして想定されていたのだろうか。

エイヘンバウムが1910年代にアンリ・ベルグソンの哲学の強い影響を受けていたことは、研究者 J. M. カーティスなどによってすでに指摘されている²⁹。ベルグソンが1911年にオックスフォード大学で行った講義が翌年ロシアで単行本化された際に、エイヘンバウムはその書評を書き、「ベルグソンの哲学の根本的な原理は、運動、そして動き一般の分割不可能性である」と述べている³⁰。

このようなベルグソンの影響は、1923年夏にエイヘンバウムによって書かれた『レールモントフ：歴史的一文学的評価の試み』³¹ 導入部の記述にも認められる。

私たちが研究するのは、時間内の運動ではなく、運動それ自体——けっして分割されたり断絶したりすることがなく、正にそれゆえに**現実**の時間を内包しておらず、時間によって測定されえないような、**動的な過程**である。……重要なのは、単なる**過去への投影**ではなく、できごとの歴史的**アクチュアリティ**を理解すること、その本質から言って恒常的であり、現れることも消えることもなく、それゆえ時間の外で作用している歴史エネルギーの展開内におけるできごとの役割を定義することである。(強調はエイヘンバウム)

ただし、カーティスが指摘しているように³²、『レールモントフ』のこの導入部は、その本論とは齟齬をきたしている。テキストや周辺資料の具体的な分析に基づき、レールモントフの創作の変遷を比較文学や文学史の観点から詳細に論じた本論は、現在でもその学術的価値を失っていない優れたものだが、導入部で提唱されているような「純粹持続」の立場からの記述ではない。

一方、これより早く1922年に刊行された『若きトルストイ』³³の序文(1921年6月執筆)には、『レールモントフ』導入部の志向とは矛盾しているように読める記述がある。

²⁸ Чудакова, с. 433.

²⁹ J. M. Curtis: Bergson and Russian Formalism, *Comparative Literature*, Vol. 28, No. 2 (Spring, 1976), pp. 109–121. Дж. Кертис: *Борис Эйхенбаум: его семья, страна и русская литература*, (Академический проект, 2004).

³⁰ Curtis, p. 112. *О литературе*, с. 8.

³¹ Эйхенбаум: Лермонтов: Опыт историко-литературной оценки, *О литературе*, с. 139–286.

³² Curtis, p. 109.

³³ Эйхенбаум: Молодой Толстой, *О литературе*, с. 33–138. 日本語訳は、ボリス・エイヘンバウム『若きトルストイ』(山田吉二郎訳, みすず書房, 1976)。

作品そのものを研究するという事は、作品を解剖することを意味すると考えられてきた。だが周知のとおり、解剖するためには、まず生ある存在を殺さなければならない。私たち(フォルマリスト)は、この罪を犯しているつつねに非難されてきた。だが、これもまた周知のとおり、比喩は証明ではない。それに結局ここで問題となっているのは、現在の生きた諸現象に対する知覚の鋭さによって興味ぶかい批評ではなく、過去の研究のうえに構築される学問の方である。過去は、いかに甦らせられようとも、すでに死んでいるもの、時それ自体によって殺されているものなのである。

ここで語られているのは、現在に生きる記述主体と過去に属するその対象との、時による分割である。「解剖」や「死」にさえなぞらえられるような記述主体と対象の断絶についてのこのような自覚と、ベルグソンの「時間によって測定されえないような動的過程」「歴史的アクチュアリティ」の認識とは、一見たがいに齟齬をきたしているようにみえる。

だが、この矛盾は表面的なものに過ぎない。エイヘンバウムが、「歴史研究」と「歴史の動的過程」とのあいだに、いっさいの媒介項なき深淵を見ているからだ。彼によれば、記述主体が把握するのは「運動それ自体」「時それ自体」ではなく、あくまでも「時それ自体によって殺されているもの」——歴史という動的過程の断片的な痕跡だけなのである。

エイヘンバウムは、記述化された歴史と、動的過程としての歴史それ自体とを峻別して考えていた。ひとは運動の断片的な痕跡を比較対照し、たがいに関連づけて整合的な体系を構築することはできるが、それは現代の観点から見て有効な歴史記述ではあるけれども、歴史の動的過程それ自体ではない。

さらには、記述化される歴史の方もまた、その主体が自由にどうこうできるようなものではない。

歴史は本質的に、複雑な分析の学問、二重の視点を持つ学問であり、過去の事実が私たちによって意味ある事実として識別され、体系に組み込まれる場合、それは必ず、また不可避免的に、現代の諸問題の基調にしたがっている。

『文学的ブイト』中のこの一節を、現代に生きる記述主体による、過去という対象に対する恣意性の容認と解釈してしまうと、エイヘンバウムの意図を読み違えることになる。ここで述べられている「歴史」は「動的な過程」そのものではなく、その過程の痕跡(過去の事実)を主体が体系化したもの、つまり記述化された歴史の方だが、前節で見たようにエイヘンバウムの考えでは、記述主体の存在形式や認識は、その属する時代の「ブイト」によって厳しく規定されている。ところでブイトとは、その時代における諸系列の配置——「動的な過程」の現代

という共時面におけるかたちである。したがって、記述化される歴史もまた、「動的な過程」としての歴史の帰結にほかならないということになる。

エイヘンバウムは、「運動それ自体」「時それ自体」を、人間がけっして至りえないものと見なしていた。彼が1921年7月に発表した文章には次のような一節がある。

私たちはいかなる原因も知ることがない。あせめてほんの些細なもので良いから、原因を知ることができるなら！全世界が変容するだろうに！だが私たちは、あちこちにある類例を知り、目にし、そして比較対照するだけだ。すべてがひとつで、小さいものや偶然や個別などはなく、すべてが大きく合法則的であることを知り、感じてはいるが。³⁴

ここで希求されている歴史の法則性ないし合目的性は、しかし「私たち」によって決して理解・認識されえないものとして想定されている。記述する主体も、記述される対象も、すべては「運動それ自体」「動的過程」「歴史エネルギーの展開」の帰結であり、エイヘンバウムによれば、したがってみずからを規定している「運動・過程・展開」そのものを語ることはできない。エイヘンバウムの記述主体は、「純粹持続」があることを知りつつも、その立場から語るという言語的な超越や遡行を断念している。

ユダヤ系ロシア文学者イリヤ・セルマンの「エイヘンバウムは大文字の歴史の中に、疑いなく存在する生と宇宙の根源を見ていた。ただし、その本質や、活動の自発的な原因を、私たちは知ることはできない。だがそれは在り、その営為の結果を私たちは刻一刻目にしている」という要約は的確なものである³⁵。エイヘンバウムは「歴史」という語によって異なる二つの審級を表していた。人間にとって不可知である歴史の動的過程それ自体と、人間が動的過程の諸々の痕跡を体系化することによって構築する表象としての歴史とである。そしてこの二つの「歴史」を峻別することが、エイヘンバウムの原則的な立場だった。

4. エイヘンバウムのトルストイ観

すでに言及したとおり、エイヘンバウムは「偏向」以降、その死にいたるまでの30年以上を、主としてトルストイの生涯の研究に捧げたのだが、それは『戦争と平和』などで歴史を主題に据えたこの作家に、記述主体のあるべき姿を見いだしていたからだろう。事実、エイヘンバウムが着目するトルストイの発言は、その多くが歴史法則の不可知性をめぐるものだ。

たとえば1935年に発表された論考『L.トルストイにおける創造への刺激』³⁶第3節では、

³⁴ П'ја Z. Serman: Б. М. Эйхенбаум и проблема истории, *Revue études slaves*, LVII/1 (1985), p. 81. に拠る。

³⁵ *Ibid.*, p. 81.

³⁶ Эйхенбаум: Творческие стимулы Л. Толстого, *О прозе. О поэзии*, с. 64–76.

トルストイの1874年の書簡中の「あなたは私たちが車輪の中を走るリスのようだとおっしゃる。……だが、そのことを語ったり考えたりする必要はありません。少なくとも私は何をしても、*du haut de ces pyramides 40 siècle me contemplent*（これらピラミッドの高みから40世紀が私を見つめている）、もし私が止まれば全世界が滅ぶだろうと確信しています」という一節が、詳細に考察されている。

トルストイのこの言に対するエイヘンバウムのコメントは、次のようなものだ。

トルストイは、私たちが「車輪の中を走るリスのよう」であるということに同意しようとはしない。もしたとえ実際にそうだとしても（トルストイが問題の本質的な解決を回避していることは注目に値する）——それは労働と活動のパトスをそこなうので、語ったり考えたりしてはならないのである。……私たちが「車輪の中を走るリスのよう」に生き、働いているのかどうかという真実を、トルストイは少しも知ろうとはしていない。

（強調は中村）

エイヘンバウムは、トルストイが歴史の「真実」を知ることを断念しているというのである。彼はさらに、不可知の「真実」と「体系」との関係をめぐるトルストイの認識を、作家の創造観に即して、次のように要約している。

トルストイは、芸術の創造を、「意味を持たず、抑えがたい本能」と定義していた。いかなる合理的な説明にも従うことのない自然で盲目的な（*стихийный*）過程であると定義していたのである。この「地上の、自然で盲目的なエネルギー」は、正にそのようなものであることによって、倫理の埒外にあり、それゆえトルストイにとっても理解しがたく、いかなる体系にも収められないようなものだ。

トルストイは自分自身にも理解不能な、したがって盲目的な（*стихийный*）力に突き動かされて、文学作品という統一的で首尾一貫した体系を構築する。ただしそれは「真実」ではない。真実は人間にはその痕跡だけが断片的なものとして表れる。トルストイはそのような断片を組み合わせ、みずからの体系——芸術作品を創造したというのである。

エイヘンバウムの描くトルストイ像はこのようなものだが、ここでの「真実」を「歴史の動的過程」に、「芸術創造」を「歴史記述」にそれぞれ置き換えるなら、それはエイヘンバウム自身の認識と重なり合わさる。あきらかに彼は、トルストイにあるべき記述主体を見いだしていたのである。

ただしエイヘンバウムは、つづく第4節で、創造に関する作家自身の定義を斥け、「トルス

トイの創造を本能や自然で盲目的な過程に帰することはできない」と強調している。

いかなる創造も、ただ自然的事実というだけでなく、歴史的な事実でもある。個人的事実であるだけでなく——、いや個人的というよりも、むしろ社会的な事実である。芸術の創造は、この点でとくに示唆に富む。その真の動機が意識のもっとも深い層——生の結果、歴史的行為の結果、人間生活の最も深刻な諸問題と結びついた様々な経験の結果であるところの、精神的・心的経験から生じているからだ。

1930年代半ばという時代の刻印を押されているようでもあるが、ここで述べられているエイヘンバウムの主張は、『文学的ギフト』と基本的に同一である。記述主体であるトルストイの志向や動機を規定し、決定していたのは、作家自身が考えていたような本能などの自然衝動ではなく、あくまでも作家を圍繞していたギフト——当時の社会状況だったというのである。

同様の見解は、『戦争と平和』に関するエイヘンバウムの1944年の記述にも認められる。「トルストイは、歴史の過程を、人間の意識を超えた、その法則が理性には理解しがたいような、自然で盲目的な(стихийный)過程であると……断言していた」と述べたうえで、しかしエイヘンバウムは「歴史を作るのは普通の人々、大衆である」と付け加えている³⁷。

エイヘンバウムは若い頃、トルストイが嫌いだったようだ。文豪がまだ存命中の1906年に、彼は父親に「数日前、よりもよってトルストイの新著『生について』を手にとってしまいました。なんとという低俗さ、狭量さ、自己満足！世界についてはいうまでもなく、人間までもが仕切りによって諸々の範疇に分類されています」³⁸と書き送っている。

エイヘンバウムの私的な書簡中のこの一節を、彼の1930年代のトルストイ論と対照してみると興味深いのは、どちらもトルストイの言説が持つあからさまな体系性に鋭く反応しながらも、その評価が逆転していることだ。文豪を聖人視し、崇拝する風潮が強かった1900年代半ばに文豪のリゴリズムに反発していた青年時代とは対照的に、1930年代のエイヘンバウムは、トルストイが範疇を駆使して整合的で首尾一貫した体系を構築したことを高く評価している。その前提にあったのは、トルストイが世界の不可知性を認めたうえで、世界に内在する人間として何を書くべきかを模索していたという認識である。動的過程としての歴史の超越と、そのような歴史に対する人間(およびその言説)の不可避的な内在とは同じことの表と裏であり、エイヘンバウムは超越的な視点を断念している点にトルストイの誠実を見いだしていたのである。

³⁷ Эйхенбаум: Творчество Ю. Гынянова, там же, с. 206.

³⁸ Дж. Кертис, с. 254.

以上のような観点から、エイヘンバウムのトルストイ研究のなかでもとくに注目に値するのは、『トルストイの歴史的意義に対するレーニンの見解について』³⁹だ。これはエイヘンバウムが1945年のレニングラード大学主催レーニン生誕75周年記念式典の席上でおこなった講演である。この2年後のエイヘンバウムの日記中に「亡命中のレーニンによるトルストイについての講演に関する興味深い資料を見つけた」という記載があることなどからも⁴⁰、彼が「レーニンのトルストイ観」というテーマを真剣かつ持続的に考えていたことは疑えない。ただし彼の問題意識は、文学現象をレーニンの発言に依拠して裁断する式の、当時のソ連の典型的な言説とは、あきらかに一線を画していた。この講演を聞いたある文学者が「ボリス・ミハイロヴィチ（エイヘンバウム）がレーニンを認めたぞ！」と驚愕したという逸話が伝わっているが⁴¹、エイヘンバウムはむしろ、当時神格化されていたレーニンを、20世紀初頭という時代の社会的配置の内に位置づけたのである。

エイヘンバウムはこの講演で、亡命中のレーニンがトルストイ逝去の報を受けておこなったいくつかの演説を考察し、「レーニン（の演説）以前は、トルストイはつねに歴史の過程の外に立つ存在のように見えていた。レーニンは、これとは逆に、トルストイが『けたたましいほどの矛盾』を抱えて現れたことが、歴史的にみて完全に合法的であり、必然的だったことを示して、この状態を克服した」と評価している。だが同じことは、返す刀でレーニンその人にも当てはまるのでなければならない。レーニンが20世紀初頭に神格化されていたトルストイを歴史過程の内に位置づけた正にそのように、レーニンの主張もまた歴史過程を超越したものではありえないからだ。

エイヘンバウムは、レーニンがトルストイを「現代の社会秩序によって抑圧されている広範な大衆」の「自然で盲目的な（стихийный）抗議と不満の表現者」と呼び、また「（トルストイは）ヨーロッパ的な教養の作家ではない」と評したことについて述べたあとで、レーニンが1890年代から人民と前衛党との関係の問題を「自然的な盲目性（стихийность）と意識性との相関の問題」として提起していたことに言及している。やや唐突なこの記述展開は、トルストイとレーニンがともに同一の時代の社会的配置の内であったことを示唆している。ロシアの民衆の自然で盲目的な感情の「鏡」、代弁者だったトルストイと、民衆に向けて西欧由来のマルクス主義という意識性を導入することを主張したレーニンとは、たがいに対称的な立場にあった。だがそれはあくまでも民衆のなかに自然で盲目的な力（стихийность）を見るという当時の知的配置に、ともに内在している枠内での対称性であった。

1945年のこの講演は、「コスモポリタニズム批判」の余波で、スターリン批判後の1957年

³⁹ Эйхенбаум: О взглядах Ленина на историческое значение Толстого, там же, с. 254-268.

⁴⁰ Б. М. Эйхенбаум: Работа над Толстым. Из дневников 1926-1959 гг., Контекст: литературно-технические исследования (Наука, 1981), с. 277.

⁴¹ Serman, p. 73.

まで活字化されなかったが、それは講演が、レーニンを脱神格化する潜在的な可能性を有していたことの傍証であるようにも思える。もっとも、この時期のエイヘンバウムを積極的な反体制派だったと考える理由はない⁴²。講演におけるレーニンの脱神格化は、秘められた抵抗というより、むしろエイヘンバウムがあらゆる対象に、例外なく自分の原則的な立場を貫いた結果であった。

5. 内在性の指標としての「作業仮説」

レーニンなどの権威的な存在や、自分自身を含めて、ひとは超越的な歴史の動的過程への内在を誰ひとり回避できない。——エイヘンバウムの生涯の固執を一言でいえばそういうことになるだろう。ただし、「社会的」とも呼ばれた彼の研究において重要なのは、人間にとって不可知である歴史の動的過程と、その内に存在する人間とのあいだに、グイト——各時代の社会における諸系列の配置——が介在していることである。歴史家としてのエイヘンバウムがめざしたのは、主として19世紀のグイトと、トルストイをはじめとする作家たちの存在形式との相関の記述だった。

だが晩年のエイヘンバウムの日記からは、グイトの影が急速に薄れ、あたかも社会の介在なしに歴史と人間が直接対峙しているかのような印象を受ける。息子が戦地スターリングラードで行方不明となり、つづけて妻をも失った1946年以降の日記では、歴史に関する記述はきわめて切迫した響きを帯びている。「なんとすべてが悲劇的に終わってしまったことだろう！働かなくては、働かなくては——ただもう働かなくては！歴史だけだ——私には他に何も残されてはいない」⁴³。「歴史がなくて何もない（地球は偶然に形成され、偶然に滅んでいく）か、歴史だけがあるか——どちらかだ」⁴⁴。このとき「歴史」は、社会的で具体的な相貌をすでに失い、ほとんど宿命というに近い。

このように歴史がなにか神秘的なものとして意識されるにつれて、エイヘンバウムは、記述主体による対象の体系化という営為それ自体を忌避し、「事実」そのものを尊重する姿勢を強めていった。1958年の第4回スラヴィスト会議の「19世紀スラヴ諸国においてロマン主義文学からリアリズム文学への移行はどのように生じたのか？」という事前アンケートに対して、彼は「理論と芸術それ自体とのあいだには、もちろん歴史的なつながりはあるけれども、(両者の)完全な融合はないし、またありえない。芸術（と芸術の創造）の特徴のひとつは、それがいかなる哲学的体系によっても生み出されたり、包摂されたりするものではないということ、

⁴² エイヘンバウムが、ゾーシチェンコ、アウマートヴァなどの作家・詩人、ジルムンスキー他レニングラードの文学研究者とともに、いわゆる「コスモポリタニズム批判」にさらされたのは1946年のことである。以後、スターリンの死後に復権するまで、エイヘンバウムはいっさいの公職を退き、論考を発表する機会もほとんど得られなかった。

⁴³ Работа над Толстым, с. 277.

⁴⁴ там же, с. 281–282.

生をそのすべての複雑さと矛盾のままに反映していることにある」⁴⁵と、理論や体系の限界を強調する回答を出している。エイヘンバウムは1959年11月24日に急逝したが、彼が最後に構想していた著書は『考証学の基礎』——手稿の整理と校訂の実践に関する入門書だった⁴⁶。

もっとも、晩年にやや極端なかたちをとったとはいえ、エイヘンバウムの「事実」尊重の姿勢は、じつはその活動の当初から一貫していたといえる。たとえば、すでに1922年の論考で、彼は次のように述べている。

……学術的な仕事でもっとも重要なのは、図式の設定ではなく、事実を視る能力であると私は考える。理論はこのために必要不可欠なのだ。なぜなら、理論の光を当てることによってこそ、諸事実が明視的になる——すなわち、真の事実となるからである。理論は滅んだり変化したりするが、理論によって見いだされ、確かめられた事実は残る。⁴⁷

このような認識と、すぐれて理論的な自身の記述とを、当時のエイヘンバウムは自分のなかでどのように整合させていたのだろうか。この関連で留意すべきは、彼が、1920年代を通じてくり返し記述主体の言説一般、あるいは自分自身の言説について、その条件性を強調していたことである。

具体的な歴史研究は、それが一般理論の諸問題に関わり、特定の理論的諸前提の基盤の上に構築される場合にのみ、学術的意義を持つことができる。事実を手中にするためには、それを受容する能力が必要だ。事実はそれ自体としては存在しない。

(『若きトルストイ』)

そのような完成した体系や原理は、私たちにはなかったし、今もない。私たちは自分の学問的な仕事において、理論をただ作業仮説としてのみ評価し、これを用いて事実を発見し、意味づける。……私たちは具体的な原理を設定し、それが素材(の分析)において正当化されるかぎりには、これを維持する。もし素材が原理の複雑化や変更を求める場合には、私たちは原理の複雑化や変更を行う。……完成した学問など存在しない。学問が生きているのは、真実の樹立によってではなく、誤謬の克服によってである。

(『「形式的方法」の理論』)

⁴⁵ Эйхенбаум: Ответ на анкету к IV Международному съезду славистов, *О литературе*, с. 458. 強調は中村。

⁴⁶ 1957年6月4日の日記の記載。см.: Работа над Толстым, с. 300.

⁴⁷ Б. Эйхенбаум: *Мелодика русского лирического стиха* (ОПОЯЗ, 1922), с. 195.

あらゆる理論は、事実そのものへの関心によって示唆された作業仮説であり、必要な事実を抽出し、体系にまとめるためののみ、必要とされるにすぎない。（『文学的グイット』）

これらの発言をフォルマリズム批判に対する弁解のレトリックと考えることはできない。だが、その一方で、オーストリアの研究者ハンゼン＝リョーヴェのように、エイヘンバウムが「文学ジャンルや手法のみならず、不均質構造内での立ち位置、語りの視点、世界観なども含めた選択の自由」を強調していたと見る解釈⁴⁸にも疑問は残る。

たしかにエイヘンバウムには、ときに世界観の複数性を強調しているかのような記述がある。

ロシアのインテリゲンツィア、そして彼らとともにその学問は、一元論の思想に毒されている。……わが国では“一元論的観点”が支配的になった。……いや、一元論はもうたくさんだ！我々は多元論者だ。生は多様であり、これを一つの要因に帰することなどできはしない。……生は川のように——間断なき奔流として動いているが、しかしその川からは無限数の細流がながれ出ており、その一つ一つが独自なのである。いっぽう芸術は、この奔流の分流ですらなく、それらの上に架かる橋だ。……学問は創造行為であり、創造とは構成する過程である……⁴⁹

だが多元論がすなわち、ハンゼン＝リョーヴェが言うような、「立ち位置、語りの視点、世界観」の「選択の自由」に直結するわけではない。引用におけるエイヘンバウムの「生＝川」の比喩が、それ自体すでに奔流とその支流というヒエラルキーを内包していることに注意しよう。支流一つ一つはたしかに「独自」であるけれども、同時にそれはあくまでも「生」という「間断なき奔流」の分岐にはかならない。生が一つの要因に収斂したりしない、多様なものであるとしても、それは生の多元的なあり方のあいだに階層性があることを否定するものではない。

上の引用でもう一点留意すべきは、「芸術」や「学問」などの「創造」が、動的な「生」それ自体からは分離した、素材（「生」の痕跡）を構成する営為として位置づけられていることだ。動的過程と言説とは、この比喩においても、あくまで異なる審級に属するのである。そしてエイヘンバウムにおいて、このような「創造」の主体が少しも自由ではなく、その属する時代のグイットによって厳密に規定されており、彼にはほとんど選択の余地などないことは、これ

⁴⁸ Aage A. Hansen-Löve: 《Бытология》 между фактами и функциями, *Revue études slaves*, LVII/1 (1985), p. 99.

⁴⁹ Эйхенбаум: 《5 = 100 (посвященная Опоязу)》, *Книжный угол*, 1922, №8. Serman, p. 76 および Дж. Кергис, с. 116 に拠る。

までに見てきたとおりである。

エイヘンバウムの「作業仮説性」の強調は、文字どおりのものである。彼が述べているのは、自分(たち)の体系や理論が「作業仮説」であり、形式としては完結し、閉じているけれども、じつは完結しているそのままに、他の体系や理論とのたえざる対話へと投げ出されているという認識にはかならない。いいかえれば、エイヘンバウムは、個々の言説が流通し交差する場、言説の外部——彼はそれをときに「生」と呼んだり「歴史」と呼んだりした——を想定していたのである。

彼が理論や体系の「作業仮説」性を強調する必要があったのは、理論体系が、じっさいにはそれ自体が「歴史の動的過程」(不可知の歴史法則)の帰結であるにもかかわらず、あたかも動的過程や歴史法則それ自体であるかのように読まれ、超越的なものとして機能してしまうことを防ぐためだ。不可知である歴史の動的過程に対する内在を絶対の前提とするエイヘンバウムは、みずからの言説の超越を回避しようとしたのである。

ロシア・フォルマリズムの世界的な評価は、1960年代のフランスから始まった。プラハから米国に移住したヤコブソンとレヴィ=ストロースとの邂逅が構造主義の形成に大きく寄与したこと、ジュリア・クリステヴァとツヴェタン・トドロフというブルガリア出身のユダヤ人がロラン・バルトの指導下にフォルマリズムの紹介に活躍したことなどを、ここで改めて詳述する必要はないだろう。ただ一点留意しておきたいのは、ロシア・フォルマリズムが構造主義と記号論の先駆として評価される過程で、エイヘンバウムが理論や体系を「作業仮説」として提示していた事実がかならずしも重視されてこなかったということである。

みずからの言説を「作業仮説」として捉えることは、エイヘンバウムの世界観・文学観・歴史観の不可欠の要素だった。もしその構想の基点にある「作業仮説」性が忘却されるなら、本来は歴史に内在しているはずの言説が、超越的・俯瞰的な視点に立つものとなってしまう。事実、欧米や日本では、そのようなエイヘンバウム理解はいまなお根強いのである。

この点では、ロシア文化圏も例外ではなかった。たとえば1920年代を亡命者の境遇で過ごしていた批評家のD. ミルスキーは、エイヘンバウムについて次のように言明している。

(エイヘンバウムの)この歴史主義は、伝統的な歴史観とは完全に断絶しているが、エイヘンバウムをマルクス主義に著しく近づけている。両者に共通しているのは、退行的だが揺るぎないドグマティズムだ。……そのうえ彼は、理論が知識に先行しなければならない、なぜならその場合にのみ研究が実り豊かなものになりうるからだと断言している……⁵⁰

⁵⁰ Дж. Кергис, с. 100.に拠る。

ミルスキーがエイヘンバウムの「理論」を「ドグマ」と呼ぶのは、それが「作業仮説」であることを見落としているからだ。彼が、記述主体が歴史法則の立場へと超越する史的唯物論と、主体が歴史に内在しつづけるエイヘンバウムとの相違を認識できないのも、同じ理由による。

だが実際には、ミルスキーが想定していたような、世界や歴史全体を俯瞰して超越的な立場からこれを語ろうとする姿勢ほど、エイヘンバウムから遠いものはない。たしかに彼の認識は、人間の思考や欲望が時代のグィットによって厳密に規定されているとする点で、シクロフスキーやミルスキーが示唆したように、1920年代後半以降のソ連で支配的だった史的唯物論と無縁ではなかったかもしれない。けれどもエイヘンバウムの記述主体が、歴史法則の名のもとに語ることはない。彼にとって歴史の弁証法は、「純粹持続」と同様に、かならずや断片的に映り、不可知である。

エイヘンバウムは、1915年に、次のような印象深い一文を書いている。

アンチテーゼはみずからの正しさを信じているのでなければならない。——ジンテーゼはただその時にだけ可能である。⁵¹

エイヘンバウムの記述主体は、形而上的実在へと超越するシンボリズム的な主体とも、「世界文化」の内で自同律に依拠するアクメイズム的な主体とも違っている。それは整合的で完結した体系を構築するが、構築された体系がみずからの認識を超越した歴史の動的過程へと投げ出されることを知っている。

⁵¹ Эйхенбаум: *О литературе*, с. 6.

Имманентность Истории: над мирозерцанием Бориса Эйхенбаума

НАКАМУРА Тадаси

В данной статье ведется рассуждение о концепции истории литературы, предложенной русскими формалистами — в частности, Б. Эйхенбаумом.

В первой главе исследуется процесс попытки восстановить ОПОЯЗ (группу формалистов) В. Шкловским, Ю. Тыняновым и Р. Якобсоном в конце 1928 – начале 1929 годов, опираясь на их переписку, дневники и т. п.. Выясняется, что в это время они думали об исключении Эйхенбаума из группы, и, что причиной этого явилось расхождение мнений о концепции истории литературы между вышеуказанными троими и Эйхенбаумом.

Во второй главе с целью осветить это расхождение сравниваются две статьи: «Литературный быт» Б. Эйхенбаума и «О литературной эволюции» Ю. Тынянова. Обе статьи были опубликованы в 1927 году. У Эйхенбаума субъект, ведущий описание – это воплощенная личность, существующая в общественном контексте ее эпохи, и форма существования которой строго определяется «бытом»: цельным соотношением различных рядов в обществе того времени. А у Тынянова субъект, ведущий описание – это методологически установленная внутри литературного ряда точка зрения, которая пропорционально расширению своего поля зрения постепенно вводит «быт» как материал в свою систему – в историю литературы. Развитием раннего формализма, изыскавшего присущие литературе качества, уместно считать замысел Тынянова. Другими словами, здесь можно обнаружить разрыв между концепцией Эйхенбаума и ранним формализмом.

В третьей и четвертой главах с целью освещения причины этого разрыва ведется рассуждение о взгляде на историю и мирозерцании Эйхенбаума, опираясь на его письма, дневники и статьи. Он считал историю вневременным динамическим процессом, закономерность которого недоступна человеку, так как он находится внутри течения данного процесса. Эйхенбаум всю жизнь старался завершить биографию Толстого, потому что в этом писателе нашел схожее со своим мирозерцание. Отвергнувший описания истории с трансцендентной точки зрения типа Гегеля, Эйхенбаум на закате своей жизни постепенно обожествлял «Историю с прописной буквы».

В пятой главе указывается на то, что Эйхенбаум постоянно учитывал неизбежную условность различных высказываний. Он повторно подчеркивал, что его высказывания являются «рабочей гипотезой». Данная условность постепенно забылась или скрылась в процессе развития будущего структурализма. А Эйхенбаум считал мир не столько целостностью, состоящейся из дискурсов, сколько наддискурсным полем, где обращаются и пересекаются различные высказывания, включая его собственные.